１　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。　　　　　〈鹿児島大〉二〇二三年度出題

　昔、ときこえし歌よみの女、世の中過ぎわびて、都にも浮かれなんどして、世に住むべきたづきもなくりけるに籠りて、心を澄ましつつ、勤めなんどして、かく、

　　あはれみへＡ世の中にありわづらふも同じやまひぞ

とよみ侍りければ、仏殿動き侍りけり。その夜の暁の夢に、貴き僧のおはしまして、「が歌の身にしみてし召さるれば、世にありつくべきほどのこと侍るべし。この暁、急ぎてりでね。もし道にて思はざること侍るとも、否ぶ心あるべからず」と見つ。あはれかたじけなく覚えて、Ｂやがて罷り出でぬ。何となく苦しきままに、ある古堂の人もなくて侍りけるに立ち入り、仏拝み奉りなんどするほどに、に乗り連れて、ゆゆしげなる人の通り侍りけるが、何とか思ひ侍りけん、この堂に入り侍れば、伊勢すべきかたなくて、後ろのかたへ行き侍るに、この中に主と思しき僧、追ひきたりて、「かやうのこと、申すにつきはばかり侍れど、仏の御告げ侍りて申すになん。我が住むかたざまをも御覧ぜられ侍れかし」とＣねんごろにきこえ侍れば、これならん、たがへんこと、仏の思し召さんも恐ろしく覚え侍りけるままに、なびきにけり。ことに喜びて、輿に乗せてに具し至り侍りぬ。にてぞ侍りける。Ｄいつきかしづくこと限りなし。子ども、あまたまうけにければ、分くかたなくわりなきものに思ひてぞ侍りける。この検校も、年ごろあひ慣れ侍りけるものに別れて、「Ｅみめかたちのあてやかに、心ざまのわりなからん人がな」と思ひなげきけるに、この伊勢を得てければ、心のままにぞ侍りける。（『』による。）

（注１）住み浮かれ……一箇所に落ち着くことができずあちこちさすらって。

（注２）太秦……京都市右京区中部の地名。 薬師如来を本尊の一つとする広隆寺がある。

（注３）薬師……薬師如来。現世の人々の病苦を救う仏として広く信仰されていた。

（注４）男山……京都府市の北部にある山。山頂に八幡宮がある。

（注５）検校……寺の事務や僧尼の監督をする高位の職の一つ。近代以前、同じ境内にあった石清水八幡宮と護国寺は一体の存在であった。

問１　傍線部Ｂ「やがて罷り出でぬ」、傍線部Ｃ「ねんごろにきこえ侍れば」、傍線部Ｄ「いつきかしづくこと限りなし」をそれぞれ現代語訳せよ。

問２　傍線部Ａ「世の中にありわづらふも同じやまひぞ」を、「あり」の意味に注意して現代語訳せよ。

◎問３　波線部「もし道にて思はざること侍るとも」とあるが、「思はざること」とは結局どのようなことだったのか。 本文に即して説明せよ。

問４　傍線部Ｅ「みめかたちのあてやかに、心ざまのわりなからん人がな」を現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ｂ＝すぐに（広隆寺から）退出した

　　　Ｃ＝熱心に申し上げますので

　　　Ｄ＝（検校が伊勢を）大切に世話をすることはこの上ない

問２　Ａ俗世で生きるのに苦労するのも、Ｂ身体の病と同様に病気（のようなもの）だよ

Ａがなければ全体０。

Ａ＝５〔「世間」「世の中」で「過ごす」なども可。〕

Ｂ＝５〔「一般の病」「普通の病」も可。ただしその言及がなく「同じ病気」だけのものは不可。〕

問３　Ａ伊勢が古堂で仏を拝んでいると、Ｂ輿や馬で連れ立った一行が通りかかり、主の八幡宮の検校が、Ｃ仏のお告げがあったと言って、自分の家に一緒に来るように彼女を熱心に誘ったこと。

Ａ＝２〔「伊勢が」と主語を明示すること。〕

Ｂ＝２〔「八幡宮の検校が通りかかり」とまとめてもよい。〕

Ｃ＝６〔「仏のお告げ」に触れていない場合は減点２。〕

問４　Ａ顔立ちが優美で、Ｂ気立てが（格別に）すばらしい（ような）人Ｃがいればなあ

Ａ＝４〔「みめかたち」「あてなり」の不備は各減点２。〕

Ｂ＝４〔「心ざま」「わりなし」の不備は各減点２。〕

Ｃ＝２

【現代語訳】

　昔、伊勢と申し上げた歌人の女性が、世の中を過ごしにくく思って、都でも一箇所に落ち着くことができずあちこちさすらいなどして、世の中で生きることのできる手段もなかったのですが、太秦（の広隆寺）に籠って、心を澄ましながら、勤行などして、このように、

　南無、薬師（如来）よ、（私を）哀れみなさってください。問２俗世で生きるのに苦労するのも、（身体の病と）同様に病気（のようなもの）だよ。

と詠みましたところ、仏殿が（歌に感応して）動きました。その夜の明け方の夢に、高貴な僧が（出て）いらっしゃって、「お前の歌が身にしみて（私には）思われ（なさ）るので、生活のよりどころを得ることができるほどのことがあるでしょう。この明け方、急いで（ここから）退出してしまえ。もし道中で思いがけないことがありましても、否定する気持ちを持ってはならない」と（おっしゃるのを）見た。ありがたさが恐れ多く思われて、問１Ｂすぐに（広隆寺から）退出した。なんとなく苦しいので、ある古堂で人けなく建っていました古堂に立ち入り、仏を拝み申し上げなどするうちに、輿や馬に連れ立って乗って、立派な様子の人が通りかかりましたが、何と思ったのでしょうか、この堂に入りますので、伊勢はどうしようもなくて、後ろの方へ行きますと、この（一行の）中で主人と思われる僧が、追って来て、「このようなことは、申し上げるにつけても遠慮がありますが、仏の御告げがありまして申し上げるのです。私が住む所の様子を御覧になってくださいよ」と  
問１Ｃ熱心に申し上げますので、（伊勢は、夢のお告げは）これだろう、そむくことは、仏が思いなさることも恐ろしく思われましたので、誘いに乗ってしまった。（僧は）格別に喜んで、（伊勢を）輿に乗せて男山に伴って帰り着きました。（僧は、実は）八幡宮の検校でした。問１Ｄ（検校が伊勢を）大切に世話をすることはこの上ない。子どもを、たくさんもうけたので、（検校は、伊勢を）ほかと区別しようもない（格別にいとしい）ものだと思っていました。この検校も、長年慣れ親しんでいました妻と（死に）別れて、「問４顔立ちが優美で、気立てが（格別に）すばらしい（ような）人がいればなあ」と思い嘆いていたところ、この伊勢を得たので、望みどおりでありました。